

藁であそぼう —自然素材をつかった幼児教育と表現の芽生え—

Play with Rice Straw — Early Childhood Education Using Natural Material and Beginning of Art Expression —

富田 晃*・松山 祐子**・野崎 克行***
Akira TOMITA, Yuko MATSUYAMA, Katsuyuki NOZAKI

要旨

幼稚園においておこなった藁をもちいた「感覚あそび」を紹介、考察する。藁は、日本の基層文化に根差した自然素材である。大量の藁を準備して、子どもたちは、五感と体全体を十分に働かせ、様々な気づきや発見をし、みずから遊び方やルールをつくり、そして、何かをつくったり、何かに見立てたりして表現したりしながら、藁との遊びを楽しんだ。それは、ほどよく細くて、長くて、やわらかくて、定形がなく、そして比較的簡単に入手できるといった藁がもつ特徴と、子どもの遊び心とがマッチしたことによる。量産の工業製品による遊具や玩具があふれている今日、あえて、自然素材そのものである藁を、子どもの遊びに取り入れる意義は大きい。

キーワード：藁 シビ 自然素材 感覚あそび 全身の活動 表現の芽生え 稲垣藁の会

1. はじめに

本研究は、幼稚園においておこなった藁（わら）をもちいた「感覚あそび」を紹介、考察するものである。水あそび、砂あそび、泥あそび、,, と、子どもは、素材と全身でかかわる遊びが大好きである。子どもは、水をかけ合い、砂を積み上げ、泥を塗りたいながら、視覚、触覚、嗅覚、聴覚、味覚と五感を働かせながら体全体で材料とかかわる。それは、人間の「生きる力」の根幹にあるところの感覚を研ぎ澄まし、感性を豊かにする活動である。本研究は、こうした材料と全身にかかわる「感覚あそび」に、日本の基層文化にある藁を取り入れたものである。本研究は昨年2019年度におこなった富田晃、久保琴枝「幼小接続期における自然との触れ合いと表現の芽生え：幼稚園年長児に対する植物仮装の実践から」『クロスロード：弘前大学教育学部研究紀要』24, 2020からの継続研究として、身近な自然をいかに幼児教育にとり入れるか、という目的のもとに実施した。身近な自然素材を幼児教育にとり入れる活動は、水、砂、土、石、葉っぱ、木の実、木切れについては、すでに広く知られている。また、幼児教育の一環に田植えや稲刈りなどの稲作をとりいれている教育・保育機関も少なからずある。一方、藁をつかった「感覚あそび」に特化した研究は管見のかぎりでは本研究がはじめてである。

2. 藁について

藁の文化的特徴について、宮崎清『図説・藁の文化』法政大学出版局、1995をもとにまとめる。人間の歴史の初めにおかれるのが石器時代である。それは、人間の定義を道具にみたときに、現在まで残る遺物が石

* 弘前大学教育学部美術教育講座 Department of Art Education, Faculty of Education, Hirosaki University

** 弘前大学教育学部附属幼稚園 Attached Kindergarten, Faculty of Education, Hirosaki University

*** 稲垣藁の会 Inagaki Wara no Kai

だったからであるが、実際には、人間は、石を加工する以前から木や草をつかって、住まいをつくったり、服やカバンをつくったりしていた。

青森県の縄文遺跡、三内丸山からは、草を編んだポッシュが発見されている。また、「縄文」とは、草をなうことでつくった紐を粘土に転がしてできた文様のことである。

稲作は、約2500年前の縄文時代後期に日本列島に伝わり、続く弥生時代に各地に広がった。以来、米が日本の主食となり、田んぼのある農村の風景が列島各地に広がった。稲作が日本文化の基層となり、米の豊穡を祈願する祭事がおこなわれるようになった。

稲作では、米の副産物として藁が大量に発生する。藁は、誰でも入手が容易な庶民の材料として、生活のさまざまなシーンで使われるようになった。米農家では、農閑期に、藁を材料にしてさまざまなものをつくった。藁をなうことでできる縄は農業、建築、造園などあらゆる作業にかかせない。そして、屋根に藁を葺き、床には藁のムシロを敷いた家に住んだ。ワラジ、クツといった履物類、ケラといった衣類、ホウキ、鍋敷き、カゴ、チグラといった道具類も藁でつくられた。主食の米は藁の俵で梱包保存され、割れやすいタマゴは「藁つと」で包み、納豆においては梱包材でもある藁が納豆菌を育てる。そして、藁は、実用品ばかりでなく、ウマやカメに見立てた玩具や、しめ縄などの神器にもなった。また、藁は、時に燃料にもなり、鯉のたたき藁の炎でいぶされる。そして、米農家は、藁から堆肥をつくり、それを用いて、次の作物を育てた。このように、日本では、古くからエコロジカルに循環する環境のシステムが構築されていた。しかし、化学肥料が普及した近年では、藁から堆肥をつくることは、ほとんどなくなり、現在、大量の藁が行き場を失っている。

3. 稲垣藁の会について

さまざまなモノが安価に入手できる現代であるが、多少時間や手間がかかっても、自ら生活に必要なモノをつくって丁寧に生きる人間の豊かさを大切にしようとしたとき、日本で古くから培われてきた藁の文化から学ぶべきことは多いはずである。

青森県稲垣村（現つがる市稲垣町）の米農家に生まれ、幼い時から藁に親しんできた野崎は、2004年に有志とともに「稲垣藁の会」（現メンバー12名）を立ち上げた。会の目的は、資源としての藁に注目し、藁の文化と技術を継承するとともに、現代の生活に適した新しい藁製品を開発することである。「稲垣藁の会」では、村のお年寄りたちから藁細工の技術を習得したり、新しい藁細工の開発をしたりしながら、藁文化の啓蒙のためさまざまな社会教育活動を行ってきた。まず、藁細工のワークショップを地域の集会場や各種学校（つがる市立稲垣小学校、つがる市立瑞穂小学校、五所川原商業高校、五所川原第一高校、弘前大学教養教育）などで行ってきた。また、環境教育として粉殻燻炭と藁をつかった水質浄化装置（エコフィッシュ）を使ったワークショップをつがる市立稲垣中学校でおこなった。

2007年12月には青森県立美術館（主催・会場）において「稲藁ワークショップ—藁∞NOW」と銘打ったワークショップをおこなった。幼児からご年配までのべ100名程が参加した。藁の会の会員が誘導しながら、参加者は、縄ないや人形・動物などのものづくりにチャレンジしたり、藁の先端部分を束ねて筆を作り習字をしたり、藁で作った馬に乗ったりした。老若男女を問わずみな藁で楽しんだ。また、大量の藁を持ち込み、そこで自由に藁と触れ合った。脱穀機を使って硬い茎の部分を取り除いた「シビ」と呼ばれる柔らかい外側の葉だけを集めた藁である。子どもたちは、頭から藁をかけたり、寝転がったり、わざと着ているセーターに藁を付けたりと、大好評であった。本研究の活動は、このときのワークショップでの経験をもとに、対象年齢を5-6才児にしたものである。本研究の活動に使用した藁は、9月末に刈り取った稲をハサ掛け（束ねた稲を横にわたした棒に掛けること）し、10日ほど天日で乾燥させ脱穀した後に、改造した足踏みの脱穀機で、藁の外側の葉であるシビを外して集めたものである。シビは、軽く柔らかいので、かつては布団の中に入れてマットレスとして使用されていた。

4. 活動の概要

2020年11月9日（月）、松山の本務校である弘前大学教育学部附属幼稚園において、やま組（5-6才児、男子13名、女子11名、計24名）を対象に藁をつかった「感覚遊び」を実施した。

軽トラック一台分の藁を幼稚園に持ち込み、ブルーシートを敷いたホールの中央に山積みにして活動の準

備を整えた。この藁は、「稲垣藁の会」が本活動のために今年収穫した稲からとったシビ（前述）だけにしたもので、フワツとした質感がある。

ホールに子どもを連れてきて、「さっき藁ってなあに、というお友だちがけっこういました。藁ってこれです。どうですか、..、それでは、今から4の針くらいまで（30分間）自由に遊んでいいよ。何か遊ぶ前にお約束決めたほうがいいのか。そうだね、お友だちの目に入らないように注意したほうがいいね。あとは大丈夫かな。では、自由に遊んでいいよ」と伝えて、子どもに自由に活動させた。藁という素材に初めて出会う子どもがほとんどであるため、藁の感触を嫌がるなどして遊びが展開されないことも予想していたが、当日は全員が藁で遊ぶことを楽しんだ。当初は藁遊びの時間を30分として始めたが、子どもたちが「もっと遊びたい」と希望したため、45分間に延長した。

子どもたちが手や体全体の感覚などを働かせて遊ぶことができるように、また、ダイナミックに遊んでも良いように、ある程度広い場所で活動させたことや自由に遊んでも良いことを事前に知らせておいたことで、子どもたちは初めて出会う藁という素材を心から楽しむことができたようである。

5. 活動の様子と所見

下記の表は、対象幼児のクラス担当者である松山が、活動の様子とその所見をまとめたものである。

シーン	活動の様子	行動の分析	所見
①	Jたちは、藁遊びが始まるなり藁の山から持てるだけの藁を持ち出して運ぶ。運んで作った新たな藁の山に思い思いに寝転がって楽しむ。	○興味・感心 ○触覚を楽しむ ○仲間との共同作業	藁との出会いの場面である。たくさんの子もたちが一齐に藁を運び出していた。あっという間に1箇所を集め小高い山を作った。迷いもせずに藁に寝転がって感触を楽しんでいた。子どもたちにとって藁との出会いは興味・感心にあふれるものであった。
②	KとRは藁の中に米粉が入っていることを発見。「先生見て。お米を見つけたよ。」と大喜びしながら集めた米粉を教師に見せた。その後ももっと見つけようと藁の先の部分を拾っては米粉を取って集めていた。	○発見の喜び ○見てほしい気持ち	いつも食している米が稲穂の中から見つかるという新たな発見をしたKとR。稲穂から米を取るという不思議さや面白さを感じたのだろう。発見した喜びを伝えたいという思いがあふれていた。
③	藁の束をかけ合って遊ぶAたち。そこら辺にある藁をかき集めては友達の上に寄せたり、かけたりし合っている。お互い嫌がる様子はない。5～6人がそれぞれ藁をかけられてはかけ返す遊びを繰り返していた。	○熱中 ○触覚を楽しむ	肌触りの良い藁の部分を集めたことにより、藁の感触が心地よいと感じたのではないだろうか。一見いざこざに発展するかもしれないと心配するくらい激しい藁のかけ合いであったが、楽しく遊び続けていた様子から、藁に触れて遊ぶ中で、子どもたちは全身で藁を感じ取る体験をしていたことがわかる。
④	藁の布団で体を休めるYとT。藁をたくさん集め小高い山になると、すっぽりと体を藁の中に入れ、暖まっている。目をつぶってみたり横になってみたりとまるで本物の布団で体を休めているようであった。	○体全体で触覚を楽しむ ○素材の心地よさに気づく	藁を積み上げる行為の繰り返しによって、藁の感触に体全体で気づくことができた。素材の感触からベッドに適していると感じ、藁の積み上げ作業を続ける中で感じたことを生かしながらベッドを完成させ体を休めていた。
⑤	藁を集めた後、真ん中に穴を開けて体を埋めるK。教師がKに何をしているのか問いかけると「これは鳥の巣だよ。」と言い、鳥になりきって過ごしていた。「本物そっくりでしょ。」と自慢げに話していた。	○物の見立て ○工夫 ○なりきる	Kは鳥の巣のイメージを既習経験からもち合わせていたのだろう。藁から鳥の巣をイメージし、自分が鳥になって過ごしていた。藁の素材から子どもが表したいことを思い付き、どのように表すかを考えながら作っていた様子から、造形活動を楽しんでいることが伝わってきた。
⑥	Hは藁でプレスレットを作りたいと、近くにある藁を集めて腕に巻き付けながら作り始めた。しかし、拾った藁を腕に巻き付けていくだけではなかなか成形できない。「難しいなあ。」と言いながら何重にも巻き付けていき、ようやく完成した。	○造形的な活動の思い付き ○試行錯誤する ○製作意欲	Hはこれまでの製作遊びの経験から、藁でもプレスレットを作ることができると考えたようだ。これまでプレスレットを作るときは人工の材料を使った物がほとんどであったが、藁という自然物からも発想し造形的な活動に向かおうとしていた。最初できなくてもすぐに諦めずに納得するまで取り組んでいたことから製作意欲を感じた。

シーン	活動の様子	行動の分析	所見
⑦	Sたちは、思い切り藁を運んでは積み上げ、積み上げた藁を投げ合って遊ぶこと30分。体力も消耗してきたのかそれぞれ藁の上で体を休める。「先生、あったかーい。」と口々に言いながら、今にも眠りそうな雰囲気でごろごろしていた。	○友達の模倣 ○素材の温かさの発見 ○心地よさ	30分以上藁でダイナミックに遊んでいた子どもたちにも疲労の色が見られるようになる。それまで投げ合っていた藁を今度は下に敷いたり体にかけてたりして体を休めていた。投げ合って遊ぶのも体を休めるのも全て藁だけでできるという素材の素晴らしさを経験で感じ取っているのかもしれない。
⑧	Mは藁から見つけた籾米から籾殻を手で取り除き、更に糠と胚芽まで取り除いて白米の状態にした物を集めていた。「先生、いつも食べてるごはんになったよ。」と得意げに何粒かを見せるM。隣で同じ作業をしていたIは「これお母さんに渡して夜ご飯で食べようかな。」と嬉しそうに話していた。	○発見の喜び ○見てほしい気持ち ○熱中 ○自然への畏敬の念 ○科学的な見方、考え方	藁の会の野崎先生に教わりながら、見つけた籾米から手作業で精米していたMとI。なかなか根気のある作業だが、まさか稲穂から普段食している白米が出てくるとは思っていなかったのだろう。不思議に思ったことを楽しそうに話していた様子から発見の喜びを感じられた。このような体験は、自然に対する畏敬の念を育て、科学的な見方や考え方の芽生えを培う上で基礎となるものである。
⑨	Hはプレスレットを作り終わると、新たに藁を集めて、てるてる坊主を作っていた。「先生、見て〜。」とてるてる坊主を見せるH。2つ目の製作はスムーズにできていたようだ。	○製作意欲の継続 ○工夫 ○素材を生かす ○気づき	Hが最初に取り組んだプレスレット作りでは、成形するまでに試行錯誤する様子が見られたが、今度は素材を生かして短時間で作り上げていた。藁は紐的な役割にも使うことができるということに気づき、ばらばらだった藁を丸くなるように巻き付けていたことから、素材の特性に体験から学んでいったことが分かる。
⑩	NはHが次々と藁で製作していく様子を近くで見ている。Hがてるてる坊主を作り始めた頃「わたしはリースを作りたいな。」と、藁を集めてリース状に成形していった。できあがると「先生、できたー。」と嬉しそうに見せるN。「Nちゃん上手だね。」と教師が答えると、「そうだから帽子にしようかな。」と今度は頭に掛けて見せた。丈夫に作ったので、長いこと頭に掛けながら新しい藁遊びを続けていた。	○よさの取り込み ○発見 ○表現の芽生え ○見てほしい気持ち	Nは、先日園行事で行われたサツマイモ収穫の際、サツマイモの蔓でリースの土台を教師と一緒に作ったという先行体験があった。Nはその経験を思い出し、藁でもリースを作りたいと考えた。ある程度藁を触って遊んだ後の遊び出しであったことから、藁を十分に触って素材に慣れてきたことや、Hが藁で製作遊びをしているのを見ているうちにリースのような形でも作られるのではないかと見通しがもてたことによる活動であった。また、できあがったリースは丈夫にできあがったことで、帽子としても活用できることに気づくことができた。
⑪	Oは藁でボールを作って遊びたいと、試行錯誤しながら藁を丸めていた。同席していた大学生にも手伝ってもらい、ようやくボールを完成させた。「サッカーをやりたい。」とホールの脇の方へ移動し藁のボールを蹴っていると、Tも興味をもって近づいてきた。Tは「これならラグビーにもなるね。」と藁のボールを抱えて走り出す。しばらく2人は藁のボールで遊ぶことを楽しんでいた。	○興味・感心 ○試行錯誤する ○新たな発想 ○遊びの共有	Oが藁でボール作りを始めたのは、遊び出しから30分ほど過ぎてからのことである。Oはそれまでの遊びで藁に触れたり、確かめたりしながら、藁の性質を知っていった。興味をもって繰り返し関わる中で、Oなりに使いこなすようになった。大学生にも手伝ってもらいながら藁でボールを作ることができ、その遊びに興味をもったTが加わり、新しいアイデアが付加された。藁がボールになるという発見を生かして更に遊びが広がっていく過程を見ることができた。

6. 活動の考察

シーン①

藁との出会いの場面である。たくさん子どもたちが一斉に藁を運び出していた。あっという間に1箇所に集め小高い山を作った。迷いもせずに藁に寝転がって感触を楽しんでいた。子どもたちにとって藁との出会いは興味・感心にあふれるものであった。

シーン②

いつも食しているお米が稲穂の中から見つかるという発見をしたり、稲穂から米を取ったりという不思議さや面白さを感じたようだ。また、本活動では肌触りの良い藁の部分を集めたことにより、藁の触感が心地よいと感じたようでもある。

シーン③

一見いざこざに発展するかもしれないと心配するくらい激しい藁のかけ合いであったが、楽しく遊び続けていた様子から、藁に触れて遊ぶ中で子どもたちは全身で藁を感じ取る体験をしていたことがわかる。

シーン④

藁を積み上げる行為の繰り返しによって、藁の感触に体全体で気づくことができた子どもたち。素材の感触からベッドに適していると感じ、藁の積み上げ作業を続ける中で感じたことを生かしながらベッドを完成させ体を休めていた姿が印象的であった。

シーン⑤

ある子どもは、鳥の巣のイメージを既習経験からもち合わせていたのだろう。藁から鳥の巣をイメージし、自分が鳥になって過ごしていた。藁の素材から子どもが表したいことを思い付き、どのように表すかを考えながら作っていた様子から造形活動を楽しんでいることが伝わってきた。

シーン⑥

これまでの製作遊びの経験から、藁でもプレスレットを作ることができると考え製作活動を始めた子どももいた。これまでプレスレットを作るときは人工の材料を使った物がほとんどであったが、藁という自然物からも発想し造形的な活動に向かおうとしていた。最初できなくてもすぐに諦めずに納得するまで取り組んでいたことから強い製作意欲を感じた。藁は紐的な役割にも使うことができるということに気づき、ばらばらだった藁を丸くなるように巻き付けていたことから、素材の特性に体験から学んでいったことが分かる。

シーン⑦

30分以上藁でダイナミックに遊んでいた子どもたちにも疲労の色が見られるようになると、それまで投げ合っていた藁を今度は下に敷いたり体にかけてたりして体を休めている様子が見られた。投げ合って遊ぶのも体を休めるのも全て藁だけでできるという素材の素晴らしさを経験で感じ取っているのかもしれない。

シーン⑧

藁の会の野崎先生に教わりながら、見つけた粉末から手作業で精米していた子どもがいた。なかなか根気のいる作業だが、まさか稲穂から普段食している白米が出てくるとは思っていなかったのだろう。不思議に思ったことを楽しそうに話していた様子から発見の喜びを感じられた。このような体験は、自然に対する畏敬の念を育て、科学的な見方や考え方の芽生えを培う上で基礎となるものである。

シーン⑨

プレスレットを作り終えた子どもは、新たな藁を集めて、てるてる坊主を作っていた。プレスレット作りでは、成形するまでに試行錯誤する様子が見られたが、今度は素材を生かして短時間で作り上げていた。藁は紐的な役割にも使うことができるということに気づき、ばらばらだった藁を丸くなるように巻き付けていたことから、素材の特性に体験から学んでいったことが分かる。

シーン⑩

ある子どもは、先日園行事で行われたサツマイモ収穫の際、サツマイモの蔓でリースの土台を教師と一緒に作ったという先行体験があった。その経験を思い出し、藁でもリースを作りたいと考えた。ある程度藁を

触って遊んだ後の遊び出しであったことから、藁を十分に触って素材に慣れていたり、藁で製作遊びをしているのを見ているうちにリースのような形でも作られるのではないかという見通しがもてたことによる活動であったと推測する。また、できあがったリースは丈夫にできあがったことで、帽子としても活用できることに気づくことができたようである。

シーン①

遊び出しから30分ほど過ぎてから藁でボール作りを始めた。それまでの遊びで藁に触れたり、確かめたりしながら、藁の性質を知っていった。興味をもって繰り返し関わる中で、使いこなすようになっていた。大学生にも手伝ってもらいながら藁でボールを作ることができ、その遊びに興味をもった子どもが加わり、新しいアイデアが付加された。藁がボールになるという発見を生かして更に遊びが広がっていく過程を見ることができた。

7. 活動のふりかえり

活動の最後に子どもたちを集めて活動のふりかえりを行った。楽しかった活動を紹介し合ったり藁について気づいたことを話したりした。はじめに、子どもたちに向かって大きな声で「どうでしたか」と問いかけると、子どもたちは、一斉に大きな声で「楽しかった」と応えた。そのあと、一人一人に、それぞれの思いを話してもらおうと、子どもは、次のように応えていた。

- お米とるのが楽しかった
- わらでお家をつくるのが楽しかった
- わらでお布団つくるのが楽しかった
- 山をつくるのが楽しかった
- どんどん仲間を増やしてみんなで寝たのが楽しかった
- 鳥の巣をつくってみた
- ボールをつくってサッカーした
- サッカーだけでなく投げてあそんだ
- わらをねじって箱をつくった
- 十字架つくってみた。ドラキュラが弱いやつ
- タコをつくった
- リースつくるのが楽しかった
- 丸めてタマゴをつくった
- わらにお米がついてるのがわかった
- わらがくつしたとかお洋服よくくつつくのが分かった
- いっぱい集めるとフワフワになるのが分かった

振り返りの場面では自分が楽しかったことを次々と話していた。藁を使って製作をした子どもたちは、普段の自由遊びの時間でも楽しんでいる製作遊びの経験を生かしていたようであった。また、藁をとにかくたくさん集めて見立て遊びをしていた子どもたちは、家や布団、山、鳥の巣などに藁を見立てて遊んだことが楽しかったようである。その他、藁から米を取ることを楽しんだ話題やそもそも藁に米がついているということを初めて知ったことへの喜びを話す子どもたちが多かった。実体験を伴う発見であり、子どもたちは目を輝かせて話していた。また、「いっぱい集めるとフワフワになる」や「藁が靴下や洋服にくつつくことが分かった」など、藁そのものの素材について気づいたことを話す子どもたちもいた。

8. まとめ

本研究の活動は、大量の藁を準備して、子どもに自由に遊ばせるものである。子どもたちは、45分の間、ひたすら藁で遊びつづけ、その間、興味・感心／触覚を楽しむ／仲間との共同作業／発見の喜び／見てほし

い気持ち／熱中／素材の心地よさに気づく／物の見立て／工夫／なりきる／造形的な活動の思い付き／試行錯誤する／製作意欲／友達の模倣／素材の温かさの発見／心地よさ／熱中／自然への畏敬の念／科学的な見方、考え方／製作意欲の継続／工夫／素材を生かす／気づき／よさの取り込み／表現の芽生え／新たな発想／遊びの共有、と、実に多様な遊びを展開した。

今回、準備した藁は、やわらかなシビだけを集めたものであるが、それ以上の特段の仕掛けはなく、自然から得られた素材そのものである。また、遊びに関してもとくに、やり方やルールなどを設定せずに、あくまで子どもの自由にまかせた。子どもたちは、五感と体全体を十分に働かせ、様々な気づきや発見をし、みずから遊び方やルールをつくり、そして、何かをつくり、何かに見立てて、表現しながら、藁との遊びを楽しんだ。それは、ほどよく細くて、長くて、やわらかくて、定形がなく、そして比較的簡単に入手できるといった藁がもつ特徴と、子どもの遊び心とがマッチしたことによる。

今回、活動をおこなった青森県弘前市は、比較的、農業が盛んで田んぼも広がる地域であるが、それでも、大概の子どもが、藁のことを知らなかったり、藁で遊んだことがなかったりした。現代社会には、量産の工業製品による遊具や玩具が満ちあふれている。そうしたなか、あえて、自然素材そのものであり、日本の基層文化に根差した藁を、子どもの遊びに取り入れる意義は大きい。

今回の活動をとおして、大量の藁に歓喜し、ひたすら遊びつづける子どもたちの元気な姿が強く印象に残った。子どもたちにとっても忘れがたい素敵な思い出になったことだろう。こうした藁をつかった教育活動が、全国の幼児教育の現場に広がることを期待する。

文献

富田晃, 久保琴枝「幼小接続期における自然との触れ合いと表現の芽生え—幼稚園年長児に対する植物仮装の実践から—」『弘前大学教育学部研究紀要クロスロード』24, 2020

富田晃, 松山祐子, 長瀬公秀, 野崎克行「ワラボーであそぼう—自然素材をつかった幼児教育と表現活動—」『弘前大学教育学部紀要クロスロード』25, 2021

宮崎清『図説・藁の文化』法政大学出版局, 1995

文部科学省『小学校学習指導要領解説 図画工作編 (平成29年告示)』

文部科学省『幼稚園教育要領解説 (平成30年3月)』



シーン①



シーン②



シーン③



シーン④



シーン⑤



シーン⑥



シーン⑦



シーン⑧



シーン⑨



シーン⑩



シーン⑪